

令和8年度

## 目黒日本大学中学校

## 入学試験問題

## 国語

試験時間 50分

## 注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全16ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示しゅうりょうにしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名



一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① エイリ目的の使用はおやめください。
- ② 耕運機をナヤにしまう。
- ③ 国王として国をオサめる。

問2 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 紙面をにぎわすニュース。
- ② 耳学問のまま意見を言うべきではない。
- ③ 細かい説明は省いて本題に入ろう。

問3 ①・②の□にふさわしい言葉を後から一つずつ選び、慣用表現を完成させなさい。

① □寝入り

ア こねこ                      イ たぬき                      ウ きつね                      エ こぶた

② 破□の勢い

ア 竹                              イ 木                              ウ 石                              エ 岩

問4 次の空らん<sup>らん</sup>に当てはまる言葉を後から一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 彼の不満<sup>かん</sup>は（ ）に態度に出<sup>い</sup>ていた。

ア あからさま

イ いたずら

ウ 気まま

エ おもむろ

② （ ）動きが人々の笑<sup>わら</sup>いをさそった。

ア あぶなげない

イ おとなげない

ウ ぎこちない

エ わけへだてない

問5 次の文のぼうせん部<sup>ぶ</sup>と同じ意味、用法の助詞<sup>し</sup>を含むものを後から一つ選び、記号で答えなさい。

歌舞伎<sup>かぶき</sup>は日本の文化だ。

ア 料理<sup>りょうり</sup>をするのは楽しい。

イ わたしの万年筆<sup>まんねんぴつ</sup>はどこですか。

ウ ばらの咲く公園<sup>こうえん</sup>に行く。

エ 彼<sup>かれ</sup>がどこへ行くのかわたしは知らない。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

「小学校二年生の初めから学校に行くのが苦しくなってしまうと、教室に入ろうとする<sup>①</sup>と涙が出てくる、そういうのが続いています」

わが子を学校<sup>※</sup>(一条校)ではない学校に通わせることになった理由を、保護者のひとりは説明してくれました。学校がいやだった、学校が合わない<sup>うった</sup>と子どもに訴えられたわけです。すでに、入学したときくらいから子どもは「この学校は合わない」と感じていたようです。「自分の名前を漢字で書けるのに、『まだ習っていない漢字だから書いてはいけません』と先生に怒られる<sup>おこ</sup>そうで、『なんで?』と言っていました。算数にしても、『自分には簡単なので先に進みたいのに、先に進ませてくれない』と不満を口にしていました。それだけではなく、すべてについて苦しくて苦しくてたまらなかつたようです」

そういう教員の指導を聞き流せる子どももいるだろうけど、「根がまじめ」だったせいなのか、聞き流すこともできず、反発を感じながらも黙って従っていたようです。そして、「自分のことは自分で決めたい」ということも家では口にしていたそうです。ガマンして学校に行っているのは、保護者の目にも明らかだったといえます。

同じような経験をもつ保護者は、じつは少なくないようです。ほかの保護者からも、こんな話を聞きました。

「三年生の二期くらいから、『学校に行きたくない』という発言が増えてきました。もともとがおしゃべりなのに、授業中にききたいことがあって口になると、『勝手に話してはいけません。手を挙げて、指さしてから話さない』と注意されたり、『休み時間に廊下<sup>ろうか</sup>で話するのはダメ』と先生に言われたりもしていました。一年生や二年生のときには許されていたことでも、三年生になると、急に許されなくなるんですね。クラスをまとめるために、先生は規律を優先していたのかもしれませんが」

それを子どもから聞いて、「そういう決まりなんだから守りなさい」と言う保護者もいるはずですが、「先生が言うんだから、やらなきゃダメだろう」と考える保護者もいるかもしれません。

②しかし、その保護者は、「先生の言うことに黙って従いなさい」と親が言うのも「ちがうな」とおもったそうです。疑問のあるときに質問したり、ましてや廊下で話したりしてはいけない理由が保護者にも理解できなかったからです。たしかに、考えてみると、その理由が筆者にもわかりません。ただ静かにさせておきたかった、くらいしか思いうかびません。そんな理解できないことを子どもにおしつけることに、その保護者は疑問を感じたそうです。

それがエスカレートしていくと、<sup>③</sup>「力づく」で子どもをおとなしくさせようとする教員も出てきます。ある保護者の話です。

「自分はおとなしく座っているのに、クラスのだれかがちょっとさわぐと、『こらーっ』と担任が大声で怒る。自分が怒られているわけではないのに、自分が怒られているように感じてしまう。『学校は楽しいところじゃない』とまで子どもたちに向かって言う。その担任が怖いと言って学校を休みがちになり、やがて行かなくなりました」

子どもたちを必要以上におとなしくさせようとする雰囲気ふんいきが学校にはあるようです。さわぐのを放っておけば学級崩壊ほつかいにつながると怖れているのかもしれない。実際、学級崩壊しているクラスの担任は教員失格の烙印らくいんをおされてしまう傾向けいこうがあります。教員にとっては恐怖きょうふだし、絶対に避けたいことなのだとおもいます。だから大きな声で子どもたちをおとなしくさせようとする教員も出てくるのでしょう。それに恐怖を感じている子どもは少なくないわけです。「それを担任に相談しても、『学校では明るくしていますよ』と『問題ない』と言わんばかりでした。しかし、帰ってくるのと暗い顔で元気がありません。気をつかう子なので、学校では努めて明るくふるまっているだけのことです。そこを先生は理解できないし、理解しようとしてくれませんでした」

と話す保護者もいました。学校側の期待に応えるために無理に自分の感情をおさえてしまう「過剰適応」<sup>④</sup>という言葉も、最近ではよく聞きます。それが子どもにとつて良くないことは当然です。

過剰適応なのかどうかを見極めるのは難しいことかもしれませんが、せめて保護者から相談があれば、その可能性を考えてみるのもいいのではないのでしょうか。即座そくざに「問題ない」と決めつけていては、子どもだけでなく保護者も傷つけてしまうことになります。

(中略)

※ホクレアには東京大学(東大)を卒業した保護者⑤がいます。その学歴なら、自分の子も東大をはじめとする有名大学に入りたいのではないかとおもってしまいます。ホクレアのように、いわゆる学力を重視していない学校では、将来の進学が心配になるのではないのでしょうか。それを、ストリートにきいてみました。

「私は中学受験して中高一貫校いっかんに入学して東大に進学しました。小学四年生がくしゅうじゅうごくから学習塾に行きましたが、学習塾では難しい問題を出してくれるのが楽しいとおもっていました。やりがいも感じていました。

ただ、勉強の内容そのものに興味があつたわけではないんです。そのとき勉強した内容も、いまは思い出せないくらいです。ただ問題を解くことが楽しかったので、いわばゲーム感覚でした。それが自分の人生を豊かにしたとおもっていません。自分は何が好きなんだろうと本気で考えはじ

めたのは、それこそ三〇歳を過ぎてからでした。

子どものころに、ほんとうに好奇心がもてることがあれば、絶対に楽しく学べただろうな、とおもいます。そういう思いがあつてホクレアに子どもを入れて、そういう学びを子どもがしているの、良かったなとおもっています」

そして四〇歳で、ほんとうに自分が興味をもてるのがみつかり、それを学びたくて大学院に入って勉強したそうです。そうした経験があるからこそ、興味をもつことの大事さを理解し、ホクレアの学びを尊重しているようにおもえます。

※ TCSのある保護者は、長年、大手企業の人事部で仕事をしています。その経験から言えることは、「学歴と社会に出てから活躍できるかどうかは必ずしも一致しない」ということだそうです。

「学歴は立派なのに、なぜ活躍できない社員がこんなにいるのか、私には疑問でした。そういう社員と面接すると、『習っていないからできません』という答えがよく返ってきます。習ったことしかできないんです。

たとえば、冷蔵庫にいろいろな食材をパンパンにつめこんでいる状態を求めているのが従来の学校です。そして、その材料を使った特定の料理しか教えてもらっていません。だから、習った料理なら上手につくれます。しかし、冷蔵庫にある材料を使って新しくおいしい料理をつくれと要求されても、『できません』と返事するしかないわけです。これでは、いまの会社では活躍できる社員にはなれません」

ちよつと前の社会では、「習った料理」を上手につくれる社員が活躍できました。そういう社員を会社も社会も求めてきました。「習った料理」しか求められないし、それが価値のあるものだったからです。

しかし、予測のできない社会になろうとしている現在、「習った料理」しかつけない社員は必要とされていません。「習った料理」のときは材料もちがってきているし、人の味覚もちがってきています。そこで「習った料理」をつくったところで、だれも見向きもしません。必要とされているのは、「習ったことがなくてもおいしい料理」です。誰もつくったことがない料理です。冷蔵庫にある材料だけで足りなければ、足りないものを調達してきてつくれる力が必要とされてきているのです。

つまり、会社や社会で活躍できるのは、習ったことがなくても、自分で創意工夫できる社員です。これまでにない斬新なアイデアから生まれる商品やサービスを生み出す社員がいなければ、会社も社会も成長を続けることができなくなっているのです。

そして、それができれば、企業が望む社員というだけでなく、どんな社会でも生きていけるし、しかも楽しく生きていけるはずですよ。

従来の学歴偏重の学校は、時代についていけなくなつてきています。その傾向はますます強まるし、学校が変わらなければ、そこで学ぶ子どもたちは社会で活躍できなくなる時代がすぐそこまで来ています。すでに学歴は立派でも活躍できないで苦しんでいる人たちが多くいるのです。

そこに気づきはじめている保護者がいて、「学校ではない学校」を選択せんたくしている。不登校といわれる「学校が合わない子どもたち」は、じつは学校が社会の変化に合わなくなっていることを教えてくれるシグナルなのかもしれません。

(前屋 毅『学校が合わない子どもたち』)

※一条校……学校教育法第1条に基づき、国が正式に認定した教育機関。小学校、中学校など。

※ホクレア……湘南ホクレア学園

※TCS……東京コミュニケーションスクール

問1 ぼうせん部①「教室に入ろうとすると涙が出てくる」とあるが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生に怒られることに対して恐怖を感じるようになり、先生のことのがきらいになってしまったから。

イ 学校での授業に疑問を抱いた保護者が、塾で勉強をする方が良いと判断するようになってしまったから。

ウ 一条校ではない学校に通うことが主流になっており、一条校の教育が不十分と感じるようになってしまったから。

エ 学校に対する不満がたまって、学校での出来事すべてについて苦しく感じるようになってしまったから。

問2 ぼうせん部②「その保護者は、『先生の言うことに黙って従いなさい』と親が言うのも『ちがうな』とおもった」とあるが、その保護者が「ちがうな」と思った理由を本文中の言葉を使って二十五字程度で答えなさい。

問3 ぼうせん部③「必要以上におとなしくさせようとする」とあるが、教員がこのような行動を取る理由について説明した次の一文の空らんにあてはまる言葉を、は五字で、は六字でそれぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

しようとする気持ちがしてしまったから。

問4 ぼうせん部④「過剰適応」とあるが、どういうことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが学校の期待する行いをするために、わざと思っていることの逆の行いをする事。

イ 子どもが先生の望むとおりのふるまいをするために、無理に自分を偽いつわってしまう事。

ウ 子どもが保護者の望むとおりの学力になるために、強制的に勉強にはげようとすること。

エ 学校が保護者の期待する通りの教育をするために、教育方針を適応させていく事。

問5 ぼうせん部⑤「保護者」は「ホクレア」のどのような学びを評価しているか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分自身の経験から、学力を上げるための勉強よりも、好奇心を持つことができる学びを評価している。

イ 自分自身の経験から、進学を目指す勉強よりも、問題を解くことに喜びを感じる学びを評価している。

ウ 自分自身の経験から、人生を豊かにする勉強よりも、勉強の内容に興味を持てる学びを評価している。

エ 自分自身の経験から、楽しく学ぶ勉強よりも、社会で活躍するためのスキルを得る学びを評価している。

問6 ぼうせん部⑥「必要とされているのは、『習ったことがなくてもおいしい料理』です」とあるが、これはどういうことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア これからの社会で求められているのは、自分で斬新な新しい料理を作ることができる料理人だということ。
- イ これからの社会で必要とされるのは、学んだことを正しく活用することができる人間だということ。
- ウ これからの社会で育てるべきものは、自分から新しいことに挑戦ちようせんしようと思欲を見せる人だということ。
- エ これからの社会で活躍できるのは、自分で新しいアイデアを作り出すことができる人材だということ。

問7 本文の内容としてふさわしいものにはA、ふさわしくないものにはBで答えなさい。

- (1) 不登校の原因は、子どもが学校に合わないということもあるが、学校が社会に求められている変化に追いついていないということもある。
- (2) 学歴は立派だが社会に出てから活躍することができない人間が多くおり、その理由は義務教育が不十分であるということが判明している。

## 三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

言葉を理解し、人間と「会話」もできるゴリラのローズ(私)は、パートナーの雄ゴリラと動物園で幸せに暮らしていた。ところがある日、柵をこえてゴリラのエリアに落ちてしまった人間の子どもを助けるためという理由でパートナーを殺されてしまったローズは、動物園を相手に裁判を起こした。しかし裁判の結果訴えは退けられ、ローズは負けてしまった。

「ローズ、待って！」なんとか私に追いついたチエルシーは顔を真っ赤にしている。「外には記者が大勢押しかけていると思うの。今後のためにも、そんなに取り乱した姿を見せない方が良いでしょう。少し落ち着いてから外に出ようよ」チエルシーは声も絶え絶えだ。

私はゆっくりとその場に止まり、チエルシーに向き直った。私は彼女に自分の気持ちを伝えるために、手話を使った。

「ごめんさい。負けるなんて思ってたから。どうしていいか分からない」

私はアメリカ式の手話を使う。両手に装着したグローブがその動きを認識して音声を発する。グローブに埋めこまれたスピーカーは他の人が話すようにスムーズな発話をする。私の手話の癖を学習させているので精度は高いが、いつでも冷静な口調なので、感情的なしゃべり方はできない。私を感じている怒りや悲しみ、困惑を伝えられないことが歯がゆい。

「そうね。本当、こんなことになるなんて思わなかった」チエルシーはしゃがみこんで私をだきしめた。

「あなたはがんばった。でもどうしようもないことってあるんだよね」

私は英語を聞き取ることができるが、チエルシーはいつでも私が分かりやすいように、しゃべりながら手話を使う。

「でも、メディアの人たちはあなたのことなんて考えてくれないよ。容赦なくひどい質問をしてくると思う。だから、これから外に出たら、何を聞かれても答えなくて良いからね。サムが車を出してくれるから、早くいっしょに帰ろうね」

私は右手の拳を自分の頭の横に持つてくると、人差し指をピンとのぼした。その動作を認識したグローブが「分かった」と発話した。

バタバタと足音が聞こえ、後ろを振り向くとユーージンがやっと私たちに追いついたようだった。ユーージンは私のすぐ近くまで来ると、つかれ切ったように両手をひざについて上体を休ませた。

「おそくなった。ごめんね。ローズは大丈夫かい？」

私は大丈夫じゃなかった。裁判に負けて大丈夫なはずがない。それなのに、何度も同じことを聞かれて私は腹が立った。大丈夫じゃないと伝えた

ところで、結果が変わるわけではないのに。

「今は話したくない。後で連絡する」

私がそう伝えると、ユージーンは心なしか少しホツとしたような表情を見せた。

「分かった。今後のこともちゃんと話さないかね。それと、メディアの連中がいつぱい外にいるだろうから、毅然とした態度でね。何も話さなくていいから」

チエルシーとその話をしたばかりだというのに、ユージーンは得意げに言った。私はユージーンにいらだち、返事をせずにとだ背を向けた。

「じゃあ、僕は帰るよ。何かあれば、連絡してくれ」

ユージーンの声が聞こえたが、私は振り向かずチエルシーと目を合わせた。たとえ手話を使わなくても、チエルシーには私が何を考えているか伝わっているような気がした。もうユージーンに頼ることなんてない。彼を信用したのがまちが이었다。

ユージーンの足音が遠ざかっていくのが聞こえた。

チエルシーは一息つくと言った。「もう行こうか？」と言った。

私はそれに軽くうなずいて応えた。

「じゃあ、あせらずゆつくりと歩いて、いつしよに外に出よう。マスコミが押し寄せてきても、私が守るからね」

②チエルシーは軽く微笑んだ。グレーのジャケットのポケットから携帯端末を取り出すと、電話をかけて端末を耳に当てた。

「サム？ 私よ。うん、もう終わった。車の準備をしてくれる？」

彼女は短いメッセージを伝えると、私を見た。

「今、サムが来てくれる。車が見えたら、一直線に向かって行って、すぐに乗ろうね。マスコミには何も答えなくていい。絶対に私のそばを離れないでね。分かった？」

③「分かった」私はさつきと同じジェスチャーをくりかえした。

(中略)

「よし、行くよ。何を聞かれても答えなくて良いからね」チエルシーは私に手を添えたまま、私に歩き出すように促した。私は拳を突き出して、体

を前に進めた。チエルシーは私の背中を押さえたまま、右手で道を切り開いて進もうとした。

リポーターの一人が私たちに気づき、マイクを向けて近づいてきた。私たちはすぐに群がる報道陣に取り囲まれた。

「敗訴はいそとのことですが、今のお気持ちはいかがですか？」

「敗因はなんだったと思いますか？」

「今後、動物園との和解の道は残されていると思いますか？」

四方からマイクが私に突き付けられ、一斉いっせいに質問が浴びせられた。私は恐ろしかったが、同時に不思議な高揚こうようを感じつつあった。カシヤカシヤとシャッターをきる音がひびく。ガラガラと焚たかれるフラッシュは目に突きささる細い針のようだ。

敗因？ そんなのは陪審員はいしんいんに聞けばいい。彼らがこの裁判の結果を決めたんだ。

そう、全ては陪審員が決めたことなのだ。十二人全員、人間の陪審員たちが。私の立場を理解してくれる者なんて一人もいなかっただろう。

「ノークメントです」チエルシーは執拗しつようなマスコミの追及ついぎゅうをかわして、道を作ろうと右手で人をかき分けた。私は彼女に守られながら、少しずつ前に進む。目指す車のある通りまではまだ遠い。私が進めば、それにあわせてカメラも追いかけてきて、まるでアメフト※の試合をしているようだった。もしこれが試合なら、私たちは劣勢れつせいだと言える。マスコミの壁かべは強力で、一步前に踏み出すのも容易ではなかった。

「評決だとうは妥当たとうだったと思いますか？」

「クリフトン動物園に伝えたいことはありますか？」

私は言われた通り、だまってマスコミの間を通り抜けていた。だが、マスコミの熱意を間近で感じたことで、興奮を覚えた。

マスコミの連中が踏みとかした雪が、びちゃびちゃと私の服とグローブをよごす。

裁判は※おごそかに、静かに行われた。今起きている、自分を取り巻く注目のいやしさや騒々そうそうしさはそれと対照的だった。そのあまりの落差は現実感がなかった。

「おい、ゴリラ！ こっち向けよ！」

背後から信じがたいほどに不躰ふしつげな言葉が投げかけられ、私は思わず振り返ってしまった。その瞬間しゅんかんを狙ねらっていたかのように、マスコミはさらに距離きょりをつめた。チエルシーは押し流されて、私から離れてしまった。

四足歩行する私の視線は低く、周りを固めている報道陣から見下ろされている。

「ローズ！ こっちよ、ローズ！」チエルシーの声が聞こえるが、人ごみにはばまれて、その姿は見えなかった。

「上訴する予定はありますか？」スタイルの良い女性キャスターが私の前に立ちはだかった。私は彼女の横を押し進もうとした。だが彼女は人の良さそうな魅力的な笑顔を完璧に保ったまま、私の道をふさいだ。

上訴すべきなのか？ もともとそのつもりはなかった。負けたらどうしようなどとは考えなかったのだ。

「今のお気持ちは？」女性キャスターは私が考えこんだのに気が付くと、質問を重ねた。私はチエルシーの助けを必要としていたが、彼女はマスコミの外に押し出されてしまった。質問に答えなければ通してもらえそうもない。

私は一言で答えようとした。指を広げた両手を胸の前にかざし、勢いよく上外側に広げた。

「私は憤りを感じている」

そうだ、私は憤りを感じている。だがそれだけではない。右手を首元に持つていき、何かを握りつぶすような動作をした。「私は恥ずかしい」

一度、感情を表現すると、言いたいことはいくらでも出てきた。

「私は夫をうばわれた。正義を求めたが、拒否された。くやしい。強い怒りを感じる」

私が語り出すとシャッター音が一層高鳴り、報道陣が活気づいた。グローブの発する味気ない口調が不快に感じられた。思わず、怒鳴り声をあげてしまいたい衝動に駆られた。だが、もしそんな「動物的な」行動をしたら私のイメージが悪くなってしまう。私はなんとか気持ちを冷静に保とうと努力した。

「今後はどうするおつもりですか？」

「何も考えていない。私はあきらめた。正義は人間に支配されている。裁判は動物に不公平だ」

私の言葉にその場がどよめいた。しゃべらない方がいいと思つたが、止められなかった。

「正義が人間に支配されているとは、どういう意味ですか？」別のキャスターが質問を続けた。

「裁判官も陪審員も全て人間。誰も私たちゴリラのことを理解しない」

私がそこまで話した時、チエルシーが群衆に割って入り、私を車まで誘導した。

彼女が後部座席のスライドドアを開けてくれ、私は車に乗りこむ。サムが前方から不安そうにこちらをのぞいている。裁判の結果を聞いたがつているのだろう。サムは私の後に乗ってきたチエルシーの表情を見て敗訴をさとしたようで、そのまま何も言うことなく車を前に進めた。

「話をしないでって言ったのに……」私のシートベルトを代わりに締めながら、チエルシーが小言をもらした。

「正義は人間に支配されている、だなんて。きっと誤解されちゃうよ。変な報道をされたら、あなたのイメージが悪くなっちゃうかもよ」彼女はそ

う言いながら助手席に移動した。

車はシカモア・ストリートを通り過ぎると、オーバーン・アヴェニューに合流した。

「本当のことを言っただけ。誰も私のことを理解してくれない。人間は動物のことなんて考えてない」チエルシーの小言にいらだちを覚え、私は反論した。

「そんなこと言わないで。今回は難しいケースだったんだよ。前例がない裁判だったんだし」  
道路を挟む並木はすでに葉が落ちきっていた。⑤こんなさびしい光景を私は知らなかった。

（須藤古都離『ゴリラ裁判の日』）

※陪審員……裁判で、被告人が本当に罪をおかしたかどうかを決めるために選ばれた一般市民。裁判官の代わりに有罪か無罪かを話し合って決める。

※アメフト……アメリカンフットボールの略。体をぶつけあいながらボールを奪って得点をねらう、アメリカでさかんなスポーツ。

※執拗……しつこいさま。

※おごそか……静かで重みのある、まじめで立派な雰囲気を持っているさま。

※上訴……裁判の決定に対する不服を上級の裁判所に申し立て、再審を求めること。

問1 ぼうせん部①「ユージーンがやっと私たちに追いついたようだった」とあるが、ユージーンという人物についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弁護士としての能力は申し分なく不利な裁判でも引き受ける優しきがあるが、行動や言動といった面に問題があるためローズからきらわれてしまう人物。

イ 落ち着きのない態度や自分を過信した言動のために初めからローズの信頼しんらいを得られず、ローズを勝利に導けなかった弁護士として信用に足らない人物。

ウ ローズに信用されて裁判に臨んだが、ローズを不快にさせる言動をくり返したうえに裁判にも敗れてしまったことでだれからも尊敬されなくなる人物。

エ ローズからの期待を受けて裁判に協力したが勝利に導くことができず、裁判後もローズへの配慮はいりよが足りないために信頼を失ってしまった人物。

問2 ぼうせん部②「チエルシーは軽く微笑んだ」とあるが、このときのチエルシーの気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間たちへの憎しみの感情を表しているローズに対し、せめて自分のことだけでも信頼してほしいという思いを伝えている。

イ 信頼していた人間たちの裏切りにあったことで傷ついたローズに同情し、どうかしてはげましてあげようとしている。

ウ 裁判に敗れたことで落ち込んでいるローズの気持ちに寄りそい、自分が味方であることを示して安心させようとしている。

エ 希望がかなえられなかったローズの悲しみを察し、気をまぎらわせてあげるために明るくふるまおうとしている。

問3 ぼうせん部③「私はさつきと同じジェスチャーをくりかえした」とあるが、「さつきと同じジェスチャー」にあたる表現を本文中から探し、そのはじめの五字をぬき出して答えなさい。

問4 本文中の(中略)よりあとの場面でのローズの気持ちの変化が正しい順番になるように、次のア〜エを並べ替え、その三番目に来るものの記号を答えなさい。

- ア マスコミの熱意に影響されて興奮を覚える。
- イ 冷静さを保てず人間に対する不満をあらわにする。
- ウ 裁判に負けた憤りをあらためて実感する。
- エ いっせいに群がってきたマスコミへの恐怖を感じる。

問5 ぼうせん部④「もしそんな『動物的な』行動をしたら私のイメージが悪くなってしまおう」とあるが、ここでの「私のイメージ」に最も近い言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 理性的なイメージ
- イ 女性的なイメージ
- ウ 個性的なイメージ
- エ 野性的なイメージ

問6 ぼうせん部⑤「こんなにさびしい光景を私は知らなかった」とあるが、ここで表現されていることとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ローズにとつてここが初めておとずれる場所であり、あまりにさびれた風景を目の前にしたことはいっそう暗い気持ちになってしまっているということ。
- イ 人間世界で非情なあつかいを受けた上にチエルシーとも心がすれちがってしまい、孤独を強く感じながら目の前の風景をながめているということ。
- ウ 傷ついた自分の思いをチエルシーにまったく理解してもらえず、普段なら心が浮き立つような風景でさえもつまらないものに感じてしまっているということ。
- エ 約束を守らなかったことをチエルシーにとがめられたために傷つき、切ない気持ちを心のそこに押しこめながら冬枯れの光景をながめているということ。

問7 この作品は、高度な知性を持ったローズというゴリラが裁判に臨むという物語だが、ローズの「正義は人間に支配されている」という言葉は、現代社会への疑問を投げかけるものでもあると思われる。次の文章は、この本文よりも前に書かれている、人間の陪審員たちが議論を行っている場面である。この場面において、あなたが陪審員の一人だとしたら、どのような意見を述べるか。次の【条件】に従って、答えなさい。

「もつと単純な話じゃないでしょうか？」今まで黙っていた一番が、七番に視線を向けながらゆつくりと話し始めた。

「単純な命の選択の話です。人間と動物、どちらの命を選択するか、それだけの話ではないでしょうか。そのままにしておいたら男の子の命が危なかったんです。動物園はゴリラの命と引きかえに男の子の命を救いました。私はその選択はまちがっていないと思います」

一番の話を聞いて、二番が大きくうなずいた。

「その通りだと思う。人間の命は動物の命に優先される。それは常識みたいなもんじゃないかな」二番は一度口をつぐんだが、思い出したように先を続けた。

「もちろん、人間の命も動物の命も同等だ、って考える人もいるだろうけどな。おれはそんな言葉信じないね。一匹のネズミを助けるために、自分の命を差し出すようなやつがいれば別だけどな。そうでもない限り、命が同等だなんて言うのは口先だけのたわごとだね」

「人の命と動物の命か……。そう考えたらやっぱりゴリラより人間の命の方が大事ですよね」

簡単に答えを出すべきではない。

多くの者がそう思いながらも、すでに合意に達しようとしていた。

【条件1】 動物園側の「選択」に対するあなたの考えを明確にすること。

【条件2】 陪審員たちの意見をふまえて、あなたの考えの根拠(理由)をくわしく述べること。

【条件3】 陪審員の一人として発言する形式で答えること。

以下余白



—